連載

海外留学から学んだもの

―― 親しくなって得るもの ――

第3回

藤本一眞
国際医療福祉大学医学部・
大学院医学研究科 教授

私の留学のきっかけになったのは，米国生理学会でのポスター発表である。発表していると米国での直接のボスとなるPatrick Tso教授が質問にきて，30分くらいやりとりをした。そのうちに突然私のところに留学にこないかということになった。当時，私は食欲の研究をしており，Tso教授は消化吸収が専門であったため，両者の関連に興味があったようである。私は九州大学の第一内科に属しており，その時の研究室主任であり後に大分大学の内科教授になる坂田利家先生に相談したところ，まずは彼が訪問してみるということになった。その後尋ねてくれて，次の年から留学することになった。ルイジアナ州立大学Shreveport校の生理学教室で主任教授がD Neil Grander教授であり，消化管生理学の中心的施設の1つであり，慶應義塾大学，名古屋市立大学，京都府立医科大学などからも留学生が来ていた。この留学が私にとって生理学から消化器病学への転向の起点となった。Grander教授やTso教授をはじめとする研究スタッフは，みんな若く私よりも2～3歳年上や同年代が多かった。女房に相談すると即決で仕事を辞めて付いてくることになり，4人家族で米国南部に留学することになった。女房が留学中にルイジアナ工科大学の修士課程に入学し，修士の学位をとったことにはびっくりした。今回は，研究のことをよりも，私が経験した他の人とは違ったことに絞って学んだことを記載してみたい。

まず何を勉強していこうかと考えた。英語に自信があるわけではなかったが，英語はどうにかなると考え，思いついたのがアメリカンフットボールのことを徹底的に調べることであった。ルイジアナ州には弱小チームのニューオリンズ・セインツというフットボールチームがあった。そこの選手の名前，監督の名前，チームの特徴，ライバルチームの有名選手の名前や特徴を調べて記憶した。ルイジアナ州立大学とルイジアナ工科大学のフットボールチームについても調べた。今のようにインターネットがあるわけではないので，調べるのにはすごく苦労したが，このことは留学して大変役に立った。米国の男性の日常会話のほとんどがフットボールの話といっても過言ではない。野球やバスケットも盛んであるが，フットボールはその比ではない。勉強したおかげでフットボールの話の中に溶け込めたので，1ヵ月もすると教授連中とはすっかり仲良しになった。フットボールに詳しい日本人というのは本当にめずらしかったようで，フットボールシーズンになるとよく家庭に呼ばれた。当時の米国南部の男性は土曜日が家庭サービス，日曜日の午前中は奥さん家族を教会に連れて行き，昼からは男性だけが家に集まりビールを飲み，バーベキューをしながらテレビのフットボールをみるのが楽しみであった。この時の連中がその後米国の生理学会の中心になり各自が活躍してくれたので仲良くなったことは帰国後大変助かったが，留学中も研究室での大切な事項はこの時の飲み会で決まっていた印象があるので，その面でも貴重な経験をした。2005年にニューオリンズがハリケーン・カトリーナで壊滅的な被害を受けたが，2010年にニューオリンズ・セインツがスーパーボールを制して世界一になったことで，ニューオリンズが復興したのはいかにも米国らしいやり方である。

次に貴重な経験だったのが，論文の書き方を教えてもらったことである。Grander教授やTso教授にも大変お世話になったが，私が一番お世話になったのは，図書館の司書さんであった。当時，坂田教授から英語のチェックをしてくれと論文を留学先に送ってきていたが，みてくれるスタッフを探すのは大変であった。Grander教授に相談すると図書館の司書さん（60歳前の女性）が以前有名な科学雑誌の編集主幹をしており，今の仕事は半分引退で暇そうにしているのでみてくれるのではないかと教えてくれた。坂田教授は論文ごとにお金も送ってくれていたので，1論文を200ドルという約束でみてもらうことにした。Tso教授に相談すると木曜日の昼からなら時間をくれるということだった。司書さんというのは基本的には暇な職業のようで特に昼からは暇なようだったので，毎週木曜日午後は

SAMPLE
Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.